

もし、こんな保育士さんがいたら・・・

もし、星のことを知りたいに時に、空にいっぱいある星のお話をしてくれたら・・・

もし、抱っこしてほしいなど思っている時に、ひざに抱いてやさしく歌を歌ってくれたら・・・

もし、絵を書きたくてたまらない時に、いろんな道具を出してくれたら、そして、やっと描いた絵を理解して、良くかけたね、とほめてくれたら・・・

もし、買ってもらったばかりのスカートが嬉しくて、でも、自慢するのが恥ずかしい時に、小さな声で「きれいなスカートだね」と微笑んでくれたら・・・

もし、一人でいたいなど思っている時に、自分だけの小さな隠れ場所を作ってくれたら・・・

もし、悲しくて悲しくて仕方がない時に、背中を優しくなでてくれたら・・・

・・・もし、そんな保育士さんがいたら、私は安心して子どもを彼女に託すだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

長男は初めて保育園に行った時、断固として靴を脱ごうとしなかった。「靴を脱がなくちゃいけないのなら僕はここには入らない」とでもいうかのように、顔をこわば



らせ私の手をぎゅっと握って立っていた。ハンガリーでも、保育室に入るには靴を替えなければならぬ。困惑する私に、保育士さんは微笑んで「そのままでもいいわよ」と言ってくれた。

新しい社会に踏み込む彼にとって、家で身につけたもので身体を覆われていることは、魔法のような守りを意味するものだったのだろう。「この保育士さんなら大丈夫。」そう思えた瞬間だった。

お腹にいる時から片時も離れずに一緒にいた子どもが保育園に入った時、時間ができて嬉しくなるよりも、まるで身体の一部がなくなってしまったかのように、どこかに隙間風がふいてスースーとして悲しかった。子どもが泣いていれば、こちらまで泣きたくなり、その後、子どもがケロッとして遊んでいたらとしても、親は子どもを心配して一日仕事を手につかない。

トイレにちゃんと行けるかしら？

お昼で嫌いなものが出てきたらどうするんだろう？

子どもが疲れたのに保育士さんは気がついてくれるかしら？

泣きたくなったらどうするんだろう？

保育士さんの言っていること分かるかしら・・・

子どもにしたら、「この人さえいれば生きていられる」と思っていたお母さんと離れなければいけない。場合によっては無理やり置いていかれることもあり、それは永遠とも思える長い時間だろう。

親のつらさと子どもの悲しさと、新学期はそんな親子でいっぱいになる。保育士の人間性が一番試される時期ではないだろうか。泣く子はうるさい。でも、辛いから泣いている。それにどれだけ共感できるか。お母さんも、心配でなかなか子どもから離れられない。お迎えに来て、いろんなことを知りたがる。その気持ちに、面倒がらずにどれだけ丁寧に対応できるか。

親としていくらがんばっても気持ちもエネルギーも追いつかない、そして、時間も無い、子育てしながら仕事をしていけばそんな時だらけだ。人生の中でも子育て中は、仕事と子育て、家族・夫婦のあり方、そして、自分自身の生き方と、悩むことに事欠かない年齢だろう。いっぱいいっぱいになっている時に「大丈夫、保育園でのことはまかせておいて」と保育士からメッセージをもらえれば親は少し肩の力を抜くことができる。

保育園ほど家庭の様々な事情が持ち込まれる場所はない。どんな普通の人にも目には見えない事情がある。子どもには子どもの、そして、その保護者にも事情がある。叱咤激励が必要なとき、ただ、

見守っているだけで十分なとき、できるだけ褒めたり励ましたりしたほうが良いとき、そして、そのタイミングと程度・・・。

子どもの発達を保障し、必要に合わせて援助すること。子どもに、私たちの生きていく世界を伝えること。社会で生きていくためのルールを伝え、そして身につけていくこと・・・。そして、子どもの親の人生の大切な一時期のパートナーとなること・・・。

保育士に課された課題は他の職業にはないほど幅広く、深く、そして、すばらしいものではないだろうか。